

研究課題（テーマ）		ユマニチュードの「触れる」技術における上肢の使い方の特徴	
研究者	所属学科等	職	氏 名
代表者	看護学部看護学科	准教授	林 静子
分担者	富山県立中央病院	看護師	矢野正晃
研究結果の概要			
<p>【目的】</p> <p>ユマニチュード®では、患者の身体に「触れる」動作に「広く」「柔らかく」「ゆっくり」「なでるように」「包み込むように」という特徴がある。特徴をふまえて講義・演習を行っているが、初学者である看護学生は指先に力が入り患者の身体をつかむように触れ、教員から指摘されるまで気づかず、無意識に行動している場合が多い。そこで本研究では、客観的かつ俯瞰的に自分自身の体位変換実施の状況を観察できるように多方向から撮影し、その映像視聴によるリフレクションによって、マニチュード®の「触れる」技術の自己評価に及ぼす影響を明らかにする。</p> <p>【方法】</p> <p>対象は、ユマニチュード®の「触れる」技術を学修した看護学部学生 8 名とし、2023 年 3 月に A 大学の看護実習室内で実験を行った。</p> <p>実験内容は、対象者が模擬患者に対し仰臥位から側臥位への体位変換を行い、その様子をビデオカメラ 4 台で a.患者の頭側、b.患者の足側、c.看護者の正面、d.上方の 4 方向から撮影した。撮影した映像（以下、映像）を 4 分割画面で同時に視聴できるように対象者に提示した。</p> <p>体位変換実施直後と映像視聴後に、自分自身の実施内容を振り返り自己評価の回答を得た。評価内容は、ユマニチュード®の「触れる」技術視点の 7 項目とし、[非常にできている・ややできている・あまりできていない・全くできていない] の 4 段階で評価を行った。さらに、評価の判断理由について自由記述を求めた。</p> <p>分析は、SPSS (Ver. 28) を用いて評価項目ごとに Wilcoxon の符号付き順位検定を行い有意水準 5%とし、自由記述は記載内容の類似性に沿ってまとめた。</p> <p>【倫理的配慮】</p> <p>富山県立大学「人を対象とする研究」倫理審査部会の承認を得た。（看護第 R4-33 号）</p> <p>【結果】</p> <p>体位変換実施直後と映像視聴後の評価点数を比較した結果、④広い面積で触れている項目（$p=0.025^*$）のみ有意差があった。評価の判断理由として映像視聴前は、各項目の視点を「意識していなかった」「忘れていた」「意識して実施できた」という記述が多く、映像視聴後は、「できていない」「予想以上にできていなかった」「もっと意識したほうがよかった」という記述が多くみられた。</p> <p>【考察】</p> <p>今回、体位変換実施状況を多方向から撮影し、4 分割画面で同時視聴したことにより、客観的かつ俯瞰的に自らの動きの評価ができたと考える。今後は、対象者数を増やし多方向撮影映像の同時視聴による教育的効果を検討する必要がある。</p>			
今後の展開			
令和 4—5 年度に行った本研究結果を論文投稿する。			